

吉弘神社の歴史

矢 島 嗣 久

一 吉弘神社内、拝殿左手前側の石碑、「吉弘神社の由来」
要約

慶長五年（西暦一六〇〇）九月十三日、黒田如水の先発隊三千人（総勢八千から九千人）および木付城の松井康之の勢、およそ二百人と大友義統よしむね九百人の軍勢とが九月九日から石垣原において戦い、大友軍右翼の大将吉弘嘉兵衛統幸むねゆきと黒田方の勇将井上九郎衛門之房ゆきむらとが雌雄を決し、井上に吉弘統幸が敗れて戦死する。統幸の首級は実相寺山にて黒田如水孝



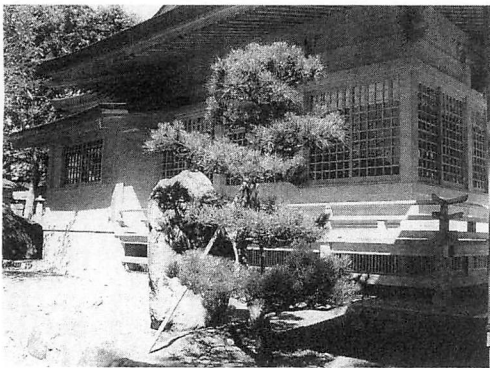
高の検分を受けた後、吉弘統幸の郷里、屋山かき（現豊後高田市、屋山〔別称八面山、標高五四三m、長安寺の東側〕、〔統幸の墓は豊後高田市松行、金宗院跡に

ある）の城に送る。

吉弘統幸は享年三九歳。亡骸なきがらは別府、宝泉寺（石垣西三丁目、県立鶴見丘高校の東側、臨濟宗太平山宝泉寺）の僧侶、里人（村人）と共にこの地に葬り「統雲院殿、傑勝蓮英、大居士」と戒名をつける（現在、宝泉寺に吉弘統幸の肖像画及び位牌が祀られている）。

統幸公の忠節を後世に伝えるために、熊本城主細川侯により神殿（石祠）を建てその忠節を祀り、墳墓のそばに一株の松を植えた。のち、統幸公の二男正久が細川氏に仕えてい。年を経て、老松が枝を垂れ、往来の旅人や参勤交代の諸公もこの墓前を乗り合わせるときは必ず下馬して参詣する。そのため「下馬の松」という。今は地名となる。

惜しいかな、明治初年（一八六八）、心なき者がこの松を伐採した。のち、大分県知事田中千里が来て、自ら二代目の松を植え、その史跡を明らかにした。



(十九代県知事 田中千里、就任、大正十年(一九二二)五月、在任期間、二年五か月)。

後に前大阪府の知事林市蔵が「代から代へ 緑伝えよ 下馬の松」の一句を石に刻んだのが、神社拝殿の左側に建立された。現在、そばに新しい松が植えられている。この石碑は大正十一年(一九二二)一月二十一日に建てられたものである。

井上九郎衛門之房ゆきかぞは天文二十三年(一五五四)生まれ、寛永十一年(一六三四年)に死去。播州姫路の出身。黒田長政の筑前移封にともない、黒崎城(福岡県遠賀郡、現北九州市八幡西区)一万六千余石を与えられた。

吉弘神社は大正十年(一九二二)九月、子孫吉弘茂義氏等、官(政府)の許可を得て、「吉弘神社」を創建する。

神社拝殿左側の石碑には「神殿建立 大坂 吉弘茂義 大正十一年(一九二二年)九月十三日」と記されている。

神社と墳墓の間の道が、昔の豊前街道の名残をとどめてい

る。
慶長五年九月十二日、夜、石垣原において仲秋の月を仰いで、吉弘統幸は一族の武將と訣別の宴を催し、辞世の歌一首を残す。

あすは誰が

草の屍かばねや照らすらん

石垣原の今日の月影

堀藤吉郎 記す

ライオンズ市民愛国憲章の中の一項目に「文化財を保護し、記念碑、史跡の標識の設置、保存に協力し、重要な史実を市民の記憶に留める」とある。

吾らこれに応えて社会奉仕の一環とし、わが郷土史の研究家 堀藤吉郎氏の記述により石垣原合戦の史実、吉弘神社創建の由来を記してここにこれを建つ

昭和五十五年(一九八〇)五月

ライオンズクラブ国際協会

別府第一クラブ

と記されている。筆者が碑文を要約、訂正して記入する。

堀藤吉郎は明治三十四年(一九〇二)生まれ、平成元年(一九八九)死去。郷土史家。文化財専門家。別府市出身。



宝泉寺は別府市石垣西三丁目八にあり、県立鶴見丘高校の東側にある。

吉弘神社の神殿（石祠）は寛永九年（一六三二）から翌十年頃、拝殿は嘉永七年（嘉永七年は存在せず、嘉永六年の翌年は安政元年（一八五四））九月に造営され、その後大正十一年（一九二二）九月に子孫吉弘茂義氏・崇敬者が政府の許可を受けて神殿、拝殿を造営した。

現在の新拝殿は慶長五年（一六〇〇年）より四百年の記念事業として平成十三年（二〇〇一）四月に創建された。

二 吉弘統幸の墓

吉弘嘉兵衛統幸の墳墓の右手前下に「吉弘統幸墓」の木製の説明板が建てられている。

「吉弘統幸墓

昭和四十七年（一九七二）

五月十日 別府市指定有形

文化財

社殿の裏手にある板碑型



の墓碑は、慶長五年（一六〇〇）

の石垣原の合戦で戦死した大友

義統方の武将吉弘嘉兵衛統幸の

墓といわれています。墓は総高

一・八五mで、刻銘はない。

近くにある石殿は、吉弘統幸

の二男正久（まほひく）が仕えた（肥後の）

細川氏が吉弘統幸のために建立

したもので、総高二・六六m、

石垣積基礎の上に建てられている。

前面の香炉台には、「明治三庚午年（かんのえうま）（一八七〇年）

奉 寄進 肥後 山形照？」と記されている。

また、墓地内（北側）にある総高一・四四mの墓碑は、統

幸の家臣室理清左衛門の墓で、「己亥（つちのとい）（標示板の己亥の己

は己（つちのと）の間違い」万治二年（一六五九）正月

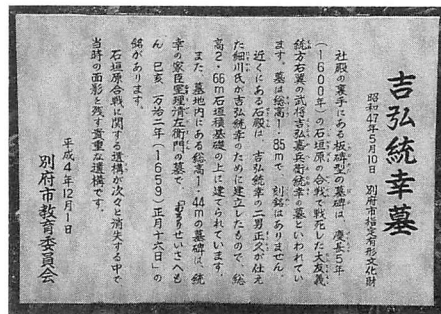
十六日」の銘がある。

石垣原合戦に関する遺構が次々と消失する中で、当時の面

影を残す貴重な遺構である。

平成四年（一九九二年）十二月一日

別府市教育委員会



と記されている。

「吉弘統幸の背くらべ石」とも言われている。

なお、吉弘統幸の墓は現在地の西側にあったが、道路建設時に改葬され、現在地に移設された、そのとき、墓の下からさびた刀剣が掘り出された。

三 豊前街道

東側の神殿と西側の吉弘統幸の石殿及び墓石との間は豊前街道の名残が残っている。西側の石殿及び墓石は一段高い。おそらく、その西側は道路拡張のため敷地が狭くなったと思われる。

四 石造り鳥居

「昭和三十四年（一九五九）

十二月吉日 建立（右側）

戸畑市

（現福岡県北九州市戸畑区）

坂井亀太郎（左側）」



五 石灯籠

「大正十一年（一九二二）八月吉日

左側 別府町長 佐藤綱五郎

御越町長 永田卓爾

右側 朝日村長 西山吉郎

石垣村長 帆足蔵太

献燈」と記されている。

御越町は、明治三十四年（一九〇一）〜大正十四年（一九二五）の速見郡の自治体名。役場は大字亀川の旧役場に設置。大正十四年亀川町と改称。

大正四年（一九一五）に帆足蔵太著の「石垣原合戦記」が発行されている。

昭和十年（一九三五）四月、石垣村、朝日村、亀川町が別府市に合併する。

六 豊玉稻荷大明神

「荒金 進、進一

平成十年（一九九九）四月吉日」

拝殿の左手奥、西南側。

七 旧拝殿

「神殿建立 大坂 吉弘茂義」 拝殿の左側に石碑がある。
表側、「大正十一年（一九二二）九月十三日」
裏側、広さ、十五坪（約五十平方メートル）。

八 新拝殿

工事開始時期、平成十二年（二〇〇〇）七月十七日
落成竣工祭実施、平成十三年四月八日

「吉弘神社 御創建四百年祭

拝殿改築竣工記念

宮司 山村太一 謹書

平成十三年（二〇〇一年）

九月 建碑

責任総代 首藤節生

屋田辰巳

首藤文夫

以下略

新拝殿の横幅、約三十三m、
奥行、十m、正面の階段を
含め約十二・三五m。



延べ五十六坪（約百八十五平方メートル）

総工事費、建物のみ、一億円。落成式等の費用を含み、総額一億三千万円。

九 狛犬（こまいぬ）

大正十四年（一九二五年）五月 建立 左側
石匠 大分 田口勘藏 右側

十 寄進者名入り石碑塔、旧拝殿建立時

帆足蔵太 発起人 一金 九百円

一金 参百円 別府 油屋熊八

一金 百円 筑後柳川 吉弘鎮安

一金 百円 吉弘家臣 室理清左衛門子孫
むろりせいざえもん

中武蔵村（現国東市武蔵町） 室家一統
むろけ

ほか。

大正十一年の米一俵（六十キロ）の値段は、十円二十銭。

油屋熊八は四国愛媛県宇和島の出身で、別府観光の育ての親とも言われている。

別府市内にはJR別府駅前及び別府公園内西側に油屋熊八のモニュメントがある。

文久三年（一八六三）愛媛県西宇和郡三崎村字佐田（現宇和島市）の間屋油屋正輔の長男として誕生。

昭和十年（一九三五）に別府市で死去した。享年七十三歳。墓は愛媛県宇和島市の照国寺にある。熊八夫婦の墓前には、亀の井バス、亀の井ホテルの供養石碑も供えられている。

十一 吉弘神社の收藏品

新拝殿竣工時、吉弘統幸直系である東京都世田谷区在住の吉弘尚正氏より寄贈の吉弘統幸公肖像画。甲冑姿。

雙（双）朱槍 穂先（剣のみあり）、柄は戦時中、宝泉寺に預けていたが、現在所在は不明。

吉弘統幸の朱塗りの槍は、朝鮮の役に軍功があり太閤豊臣秀吉から拝受されたものである。

采配

感状

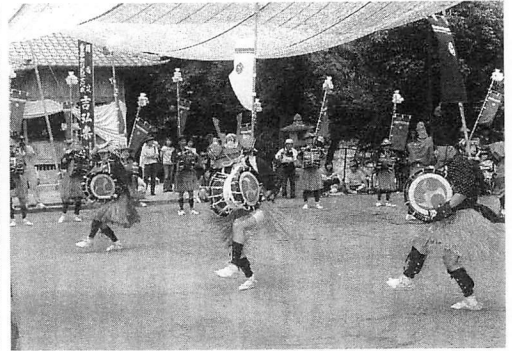
十二 吉弘氏の出自

豊後大友氏初代大友能直よしのなおの十二男泰広が国東田原氏の初代、田原氏四代貞広の弟が吉弘氏初代又三郎、正堅まさかた（法名正賢）、二代氏輔うしすけ、七代親信ちかのぶ、博多にて戦死、八代氏直うしなお、石見

守、豊後勢場ヶ原で戦死、九代艦理あまただ病死、十代鎮信しげのぶ、日向高城で戦死、十一代統幸、豊後石垣原で戦死、鎮信しげの弟鎮種たね、高橋家を継ぐ、筑前岩屋で戦死、嫡子統虎、立花家の養子、立花宗茂むねしげと称す。

国東市武蔵町、県道五五号線沿いの吉広楽庭がくよちには、楽庭八幡社があり、毎年（旧六月十三日、第四日曜日、平成十九年度より）、平成二十三年（二〇一一年）七月二十四日（日）に八幡社内にて吉弘楽が奉納されている。

八幡社から県道五十五号線を南に隔てて吉弘氏七代の墓が民家の裏庭の築山にまとめられてある。



平成二年（一九九〇年）九月には、吉弘統幸没後三九〇年祭を記念して別府市の吉弘神社前の公園で吉弘樂が奉納された。

十三 太鼓

奉納 吉弘御一統 吉弘 勇、吉弘重幸、親子より寄贈される

広島県佐伯郡能美町大字鹿川（江田島内西側の中央部）

十四 室理せいざ衛門の墓

国東市武蔵町在住の室利則氏からの手紙の要約。

室家は吉弘家初代正堅以来吉弘家第十一代統幸が慶長五年（一六〇〇年）九月十三日討ち死にしたときまで、代々統幸の重臣として仕えていた。吉弘神社裏の熊本肥後藩主細川が建立した統幸石殿に向かって右側にある室理せいざ衛門の墓は室家の祖先の墓である。

主君吉弘統幸は合戦当時、大友第二陣の総大将として最右翼の陣に付き、六度に渡り敵陣に突入し、幾多の戦果を挙げた。最後は黒田軍の大將井上九郎左衛門之房ゆきむらと渡り合い、朱

柄の槍を構えてしごき、いざ勝負せんと火花を散らし勇壮に戦ったが、再三に渡つての戦いに疲労その局に達し、遂に我に利あらず、三十七才を一期として石垣原の露と消えた。現にも吉弘神社境内に等身大の墓石が残されている。

統幸は数度に渡る戦いに力尽き、弓矢折れ、家臣室理せいざ衛門の肩にかかり統幸は小高い丘の上上がり自害して果てた。その時、彼を介錯申上げたのが一族の室戸衛門であった。家臣一同、主人を丁重に葬った後、理せいざ衛門は仔細あつて吉弘村（現国東市武蔵町吉廣）へ帰り、十三日から二日後に行なわれた徳川東軍と西軍石田三成軍との天下分け目の関ヶ原の合戦の結果を見届けて主君統幸の墓前に報告せんがための深い考えがあつたのが、後で知れたのであつた。翌年慶長六年九月十三日、統



幸の一周忌にはるばる吉廣村から石垣原に来て統幸の墓前に額ぬかずいて合戦後の成り行きを報告して、墓前にて殉死した。

また、理せいざ衛門の墓の後に小さな二基の墓がある。それはその時、理せいざ衛門にお供をしてきた二人の郎党で、主人理せいざ衛門の死骸を丁重に葬った後で、これまた主人の理せいざ衛門に殉死したという美談が当家に代々伝わっている。

その証しとして理せいざ衛門の嫡子馬之丞の住居跡にある石碑に刻んである。(刻銘は「室理せいざへもん」とある)

十五 石碑 (室理清さえもんの墓の右手、北側にある)

一道是観信士 明和七寅天 (明和七年は庚寅、(一七七〇年))

筑後三悟? 草場村 久右衛門?

十六 吉弘神社東側の吉弘公園

別府国際観光温泉文化都市建設設計が石垣第二土地画整理事業により、昭和三十九年(一九六四)に着手、当時吉弘神社境内地であった、公園用地として一千坪(二千三百平方メートル、三・三アール)を別府市に寄付する。この場所は以前

から桜の名所でもあった。

十七 吉弘神社の祭祀

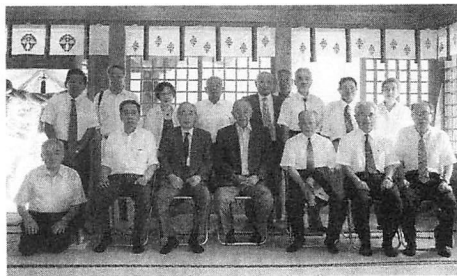
一月 一日 元旦祭 (正月参拝)

四月 八日 春の大祭

九月十三日 秋の大祭

(吉弘統幸公の命日)

年二回の例祭には、吉弘氏子孫の方々が、東京、大阪、広島、福岡、久留米、熊本ほかから参列される。



十八 神社西側の鳥居と石碑

神社西側の道路に面した鳥居には「平成十三年（二〇〇一）三月、別府市（有）橋本石材店 橋本章三」と記されている。

なお、石碑には

「平成十七年（二〇〇五）

九月吉日 建碑

宮司 山村太一

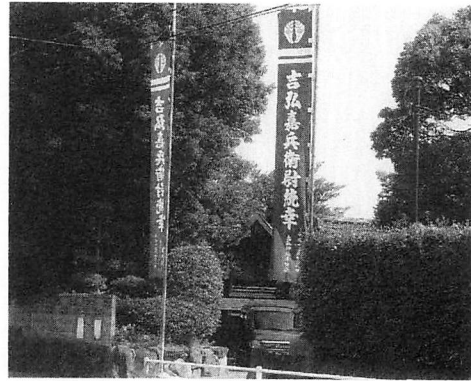
責任総代 下和田巖

佐藤泰造

矢田詔之

世話総代 一同

と記されている。



十九 帆足蔵太について

吉弘神社の創立者は帆足蔵太石垣村長である。帆足蔵太は杵築史談会会長の久米忠臣氏（杵築市在住）の祖父の叔父にあたる。子孫は別府市亀川に在住されている。

二十 廣池長良について

廣池長良は愛媛県松山市の出身で、当時旧制杵築中学の国語の教師をしていた。夫人は大分県杵築の出身で久米忠臣氏の分家筋にあたる。長良は昭和十七年（一九四二）五月二十六日から夫婦共に吉弘神社の宮司として社務所に住居した。吉弘氏の伝記は別府及び大分県立図書館から資料集めをした。なお、別府市長の末松浩一郎氏及び別府図書館長、兼子鎮雄氏から資料を頂いた。伝記は昭和二十年（一九四五）一月二日より清書を始め、同年三月七日に完成させた。

昭和二十年四月七日に春季大祭式典後、「吉弘神社祭神

吉弘統幸公傳 全巻」完成の報告式を執り行っている。

昭和二十二年五月に「吉弘統幸公傳」の孔版印刷、発行をしている。大阪市東成区で印刷、製本された。なお、廣池氏は当時、別府市から大阪市阿倍野区に住居していた。

謝辞

吉弘神社、宮司 山村太一氏、東京都世田谷区在住の吉弘尚正氏、杵築市在住、杵築史談会会長の久米忠臣氏、国東市武蔵町在住の室利則氏に資料及び原稿の校正をお願いしました。

紙上をお借りして厚く御礼を申し上げます。

室利則氏よりの手紙

参考引用図書

『九州関ヶ原 石垣原合戦』 帆足溢男著

二〇〇五年（平成十七年）秋

『石垣原合戦記』 帆足蔵太著 一九一五年（大正四年）六月

平成十年度秋季特別展覧会『関ヶ原合戦と九州の武将たち』

『石垣原合戦記』 久米忠臣著 一九九一年（平成三年）七月

一九九八年（平成十年）十月、

『石垣原合戦』 久米忠臣著

八代市立博物館未来の森ミュージアム

二〇〇一年（平成十三年）三月

『豊後石垣原軍記大成』 安部巖編

一九七〇年（昭和四十五年）九月

『九州関ヶ原 石垣原の戦い』 三角寛市著

一九九一年（平成三年）五月

『吉弘神社祭神 吉弘統幸公傳』 全巻 廣池長良編

一九四七年（昭和二十二年）五月

『大分県歴史人物事典』 大分合同新聞社

一九九六年（平成八年）八月

『別府の古い道 歴史散歩』 別府史談会

二〇〇九年（平成二十一年）二月

『別府史談』 二〇〇七年（平成十九年）第二十号

「改訂 石垣原合戦の史跡について」 矢島嗣久

『別府史談』 二〇一〇年（平成二十二年）第二十三号